

鹿児島の植物59

種子島の植物

植物担当 寺田 仁志

種子島は日本の照葉樹林のふるさと

種子島は今から1万7千年ぐらい前は九州と陸続きだったといわれています。というのもその頃は地球全体が今より寒く氷河期といわれる時代で、大陸に水が氷となって多く集まって海水面が低くなり、陸地が広がっていたからです。

このため種子島は広くなり、九州や屋久島とつながっていました。種子島と同じ緯度ではブナ林などの落葉樹林帯となりがちですが、種子島の海岸部には黒潮が当たり、イスノキやタブノキなどの常緑広葉樹（照葉樹）が森をつくっていました。別な表現をすると種子島は、照葉樹たちの寒さからの避難所になっていたわけです。



タブノキ

このことは、種子島に日本で

最も古いといわれる旧石器時代の遺跡が多数あり、当時の環境を推定するため、土壌に含まれるプラントオパール（植物化石）の分析結果からも判明しています。

その後地球は温かくなり、種子島を中心にあった照葉樹は北上し、ついには東北の海岸付近にまで広がっています。このことから種子島を含む地域は日本の照葉樹のふるさとと言われます。

また、地球規模で見ると日本の照葉樹林は多様で面積がひろいことから世界の照葉樹林のふるさととも言



イスノキ

てもいいのかもしれませんが。

火砕流から復活した種子島の自然

約7300年前、種子島の北西海上の三島村硫黄島南端付近を火口とする鬼界カルデラの火山活動で火砕流や大量の火山灰堆積がありました。

2011年に起こった新燃岳噴火でも5cmほど

火山灰が堆積するとアカマツはほとんど枯れましたが、鬼界カルデラの爆発規模は比較にならないほどの巨大な噴火であったことから、多くの生き物たちは絶滅に追い込まれと考えられます。

ところが、今種子島には千数百種の植物が自生しています。鬼界カルデラの爆発以降一度も九州や屋久島とも陸地がつながったことはありませんので、今生えている植物は風や波などの自然の力で種子や胞子が運ばれてきたのでしょうか。また、一部の種は鳥やコウモリなどが空から、また、さらに一部は人間が運んできたのです。特に隣の屋久島と比較して平坦地が多い種子島は人にとって魅力的な島で



ヤクタネゴヨウ

九州や時には南方の島々から人々がわたってき、人とともに植物たちも進出したものとおもわれます。

さて、自生する種の中で世界でも屋久島と種子島にしか生えていない固有種があります。ヤクタネゴヨウやカンツワブキ、ヤクシマサルスベリ、ヤクシマオナガカエデなどです。いずれの種も急峻な崖や溪谷に生えるものです。

火砕流や火山灰は、崖や溪谷では完全に覆い被さることは無かったため生き残ったのではないかと考えられます。2011年の新燃岳の噴火でも大量の



ヤクシマサルスベリ

降灰があった新燃岳や中岳の外壁部にはミヤマキリシマやネジキ、リョウブなどからなる低木林が健在なことからも推測できます。

このように考えると種子島の植物たちは自然の猛威と人の干渉を受けて独特の生態系を形成してきたといえます。